

## V. 事例

つの指示が同時に入ることが少ないように心がけ、見通しを明確にするため1日の行動のスケジュール化をおこなった。また本人が入院中に購読した新聞で「発達障害の特集」を読み、自らのことをアスペルガー障害とトゥレット障害であることを発見したことをきっかけに、書籍等を媒介として疾病理解と自己の認知形式の理解がすすむように援助した。

入院1ヶ月の時点で、措置解除、医療保護入院とし、上記症状の緩和と本人・家族の障害受容と認知が進み、入院期間は8ヶ月で退院とした。なお入院6ヶ月の時点で、入院のまま、家庭裁判所まで両親と外出し審判を受け、保護観察処分となった。

退院時の目標は「自宅に引きこもりながらの安定」、「1対1の人間関係の中での安定」とした。そのため過去のいじめられ体験に満ちた場所より引越し、相性の悪い妹とは対角線の位置に部屋を位置した。また本人の得意とする勉強を生活の手がかりとし、思春期ケアマネジメントモデル事業と保護観察BBSシステムより、教育学部大学院生の家庭教師2名の派遣をうけ、当院より心理士の自宅訪問を定期的（月1）におこなった。

退院後1年で保護観察処分は解除となり、その頃より、勉強は大検予備校で個別指導をうけ、家庭教師は、同伴しての自宅外への外出など、「1対多のなかでの安定」を目指すものとなった。その後、数年が経つが少しずつ症状は緩和し、社会での不適應も減じている。

＊少年鑑別所入所中から往診や外来受診にて精神科医療の関与を行い、措置入院となって後も、少年審判は継続し、退院後も医療と司法とが同時関与した。橋渡しでない同時関与は治療上も有効であり現行法制上もある程度可能と考えられた。

## VI. 今後の課題

国立精神・神経センター国府台病院 齊藤万比古

行為障害に関するわが国初の臨床的な指針が本ガイドラインである。本ガイドラインは、実際にはまだ広くコンセンサスを得たとはいえない行為障害概念について、医療・保健・福祉・教育の諸領域における行為障害概念の意義、とりわけ精神科医療にとっての行為障害概念の有効性、そしてどこから、あるいはどこまでが医療の関与すべき問題かを示す境界などを明確にすることを第一の目標とした。さらに、矯正機関や医療をはじめとする行為障害に関与する諸機関で行われている、あるいは今後行われるであろう試行中の治療・援助法を提示することを第二の目標とした。

第一の領域で、本ガイドラインはDSM-IV-TRの行為障害概念に基づく診断アルゴリズムを提示するとともに、そのDSM-IV-TR診断を含んだ行為障害の包括的評価のためのフローチャートを作成し、DSM-IV-TRの行為障害の診断に加えるべき医学的評価の対象を明確にした。しかしながら、行為障害の疾患概念と診断基準そのものが現在のところあくまで過渡的な水準にあり、医学の対象たる疾患概念としてはあいまいさを否定できないことから、今後さらに精神疾患としての意義を中心にした明確な概念化が必要であるだろう。この新たな概念を基盤として新たな診断基準が設定されることになるが、その診断基準は現行のDSM-IV-TRのように行動だけを指標とするのか、あるいはICD-10が意識しているような情緒や関係性の問題をも指標に含むものにするのかという課題をはじめ、解決すべき課題は多い。

また、行為障害の広がりをとらえる下位分類についても専門家の間でもまだ意見の一致は見られない。本ガイドラインではDSM-IV-TRの小児期発症型と青年期発症型の2分類について解説するのは別に、CDCLの作成と標準化を行う過程で抽出された暴力型、虚言型、混合型、未分化型も提示しておいたが、これらの下位分類の利用法などについては今後の検討にゆだねられる課題である。

第二の領域である治療・援助法について、本ガイドラインは医療機関、児童相談所、地域保健機関、自立支援施設、少年院などの諸機関が実施している治療・援助の概要を提示した。しかし、現段階ではこれらの治療・援助活動は各々の分野で独自に展開しているものであり、システムとしての包括性や統合性はいまだ確立していない。本ガイドラインは非行少年や犯罪少年のすべてへの対応に指針を出そうとしているものではなく、あくまで行為障害と診断可能な子どもが対象であり、なかでも発達障害を背景に持つ事例や虐待を受けた子どもの情緒的な問題も伴っている行為障害、精神疾患の併存が見られる行為障害など医療対象となりやすい子どもをまず対象とした対処法の提示である。本ガイドラインには行為障害の治療・援助において医療機関が関与すべき領域を示すフローチャートを掲載し、どこまでが医療かの問いに答えようと努力した。しかしこの課題は流動的であり。医療機関、保健・福祉機関、そして矯正機関の各々の役割や、治療・援助における相互乗り入れなどの状況が変化するにつれて代わっていくものであり、その進歩に応じてこのアルゴリズムは変化させていくべきだろう。また本ガイドラインが提示した治療・援助技法の多くは現在実践中あるいは現在開発中のものであり、まだ十分にスタンダードとはなっていない技法も含まれている。これらの技法をさらに発展させ、具体的に提示できるよう、さらに経験を増加させる必要がある。

本ガイドラインに結実した行為障害に関する臨床的な取り組みと、それをめぐるリサーチが今後さらに発展し、本ガイドラインを大きく塗り替えていってくれることを、現在そして未来のこの国の子どもたちや若者たちのために期待したい。

## 〔V〕 研究成果の刊行に関する一覧

## 研究成果の刊行に関する一覧

### 書籍

- 齊藤万比古, 渡部京太, 藤井 猛, 小平雅基, 宇佐美政英, 秋山三左子, 入砂文月, 佐藤至子 (2004): 児童精神科における ADHD の診療の現状. 厚生労働科学研究 (効果的医療技術の確立推進臨床研究事業)「小児科における注意欠陥/多動性障害に対する診断治療ガイドラインの作成に関する研究」平成 15 年度総括・分担研究報告書, 1-11.
- 齊藤万比古(2004): 不登校・ひきこもりは時代を写す鏡. 斎藤 環監修; hikikomori@NHK ひきこもり, pp76-79, NHK 出版, 東京.
- 齊藤万比古(2004): 2 次性障害と ADHD の経過. 上林靖子, 齊藤万比古, 小枝達也ほか: こころのライブラリー(9) ADHD (注意欠陥/多動性障害) —治療・援助法の確立を目指して—, pp159-170, 星和書店, 東京.
- 齊藤万比古(2004): 児童精神科. 吾郷晋浩監修: ストレスと病い 診断・治療と予防, pp215-221. 関西看護出版, 大阪.
- 齊藤万比古(2005): 学校予防と対策 (スポーツクラブを含む). 石川俊男, 鈴木健二, 鈴木裕也 他編: 摂食障害の診断と治療ガイドライン 2005, pp142-144, マイライフ社, 東京.
- 齊藤万比古(2005): 精神科医の立場からみた子どもの不安症. 久保木富房編: 子どもの不安症, 小児の不安障害と心身症の医学, pp15-30.
- 齊藤万比古(2005): 思春期・青年期の精神医療行政の現状と今後の課題. 坂田三允, 根本英行: 精神看護エクスペール 15, 思春期・青年期の精神看護, 中山書店, 東京, 136-143.
- 齊藤万比古(2005): 子どもの診察・診断の仕方. 上島国利, 市橋秀夫 他: 精神科ニューアプローチ 7, 児童期精神障害, メジカルビュー社, 東京, 2-13.
- 齊藤万比古(2005): 不登校. 萱間真美, 櫻庭繁 他: 精神看護エクスペール 12, 子どもの精神看護. 中山書店. 東京. 202-213.
- 齊藤万比古(2006): 向精神薬の使い方. 大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎 (編): 今日の小児治療指針 第 14 版, pp517-518.
- 齊藤万比古(2006): 家庭内暴力. 上島国利, 久保木富房 (監修): レジデントハンドブック ◆Case Study 抗不安薬・睡眠薬・抗うつ薬・気分安定薬の使い方, pp89-93, アルタ出版, 東京.
- 齊藤万比古(2006): 治療の基本的考え方—児童精神科の立場から. 加我牧子, 稲垣真澄 (編): 医師のための発達障害児・者診断治療ガイド—最新の知見と支援の実際, pp115-121, 診断と治療社, 東京.
- 齊藤万比古(2006): 不登校の児童・思春期精神医学. 金剛出版, 東京.
- 齊藤万比古, 渡部京太 (編) (2006): 改訂版注意欠陥/多動性障害—AD/HD—の診断・治療ガイドライン. じほう, 東京.
- 齊藤万比古(2006): 児童期の精神障害. 精神保健福祉白書編集委員会 (編): 精神保健福祉白書 2007 年版 障害者自立支援法—混迷の中の船出, pp176, 中央法規出版, 東京.

- 齊藤万比古(2006)：Q & Aこんなとき、どう対処するか？ Q. 入院治療が必要になった時. いとしご増刊 自閉症ガイドブック シリーズ 4 成人期編, 日本自閉症協会, 東京.
- 齊藤万比古(2006)：発達障害としてみた不登校. 太田昌孝 (編)：発達障害, pp171-181, 日本評論社, 東京.
- 奥村雄介(2005)：精神障害と非行・犯罪. 中島義明編：新・心理学の基礎知識, 有斐閣, 東京.
- 奥村雄介(2006)：非行精神医学. 医学書院, 東京.
- 奥村雄介(2006)：少年犯罪. 司法精神医学第 3 巻, 犯罪と犯罪者の精神医学, 138-145, 中山書店, 東京.
- 犬塚峰子, 伊東ゆたか, 柴崎喜久代等(2004)：児童相談所における子ども・家族のアセスメントに関する研究—児童相談所で保護した被虐待児の前方視的追跡調査. 厚生労働科学研究(子供家庭総合研究事業)「児童福祉機関における心理的アセスメントの導入に関する研究」平成 15 年度研究報告書.
- 犬塚峰子(2004)：子どもの人権とは. 市川宏伸等編：子どものこころのケア, 永井書店, 東京.
- 犬塚峰子(2004)：家族再統合のための援助事業の試み. 児童虐待防止対策支援・治療研究会編：子ども・家族への支援・治療するために—虐待を受けた子どもとその家族と向き合うあなたへ, 日本児童福祉協会, 東京.
- 犬塚峰子, 安達由喜子, 伊藤くるみ他 (2005)：虐待を受けた子どもの心理診断のための半構造化面接法の開発. 厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)「児童福祉機関における思春期児童における心理的アセスメントの導入に関する研究」平成 16 年度分担研究報告書; 5-11.
- 犬塚峰子(2006)：「家族再統合のための援助事業」を利用した事例. 子どもの虐待の予防とケア研究会編：子どもの虐待の予防とケアのすべて追録第 5 号, 第一法規, 東京, pp4459-4473.
- 犬塚峰子, 伊藤くるみ, 伊東ゆたか他(2006)：虐待を受けた子どもの心理診断のための半構造化面接法の開発. 厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)「児童福祉機関における思春期児童における心理的アセスメントの導入に関する研究」平成 17 年度分担研究報告書, 7-74.
- 犬塚峰子(2006)：子ども虐待と家族支援. こころの健康シリーズⅢ, メンタルヘルスと家族支援, 日本精神衛生会, pp1-7.
- 犬塚峰子(2006)：児童相談所における精神科医療のニーズ. 小野善郎編著：子どもの福祉とメンタルヘルス, 明石出版, pp89-129.
- 近藤直司(2006)：青年期のひきこもりをめぐる臨床研究の課題. 平木典子, 稲垣佳世子, 岩田純一他：児童心理学の進歩 2006 年度版, pp162-183, 金子書房, 東京.
- 藤岡淳子(2006)：性暴力の理解と治療教育. 誠信書房, 東京, 全 291 頁.
- 原田 謙, 今井淳子, 酒井文子(2005)：反抗挑戦性障害と行為障害. 上島国利 (監修)：精神科臨床ニューアプローチ 7, 児童期精神障害, メジカルビュー社, 東京, pp102-109.

- 原田 謙(2005): ADHDにおける反抗挑戦性と大脳辺縁系に関する研究. 平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究C-2)研究成果報告書.
- 原田 謙(2006): 併存障害 1. 行動障害群(反抗挑戦性障害, 行為障害)ほか. 齊藤万比古, 渡部京太(編): 注意欠陥多動性障害の診断治療ガイドライン, pp100-104ほか. じほう社, 東京.
- 原田 謙(2006): 反抗挑戦性障害・行為障害と軽度発達障害. 石川 元(編): 現代のエスプリ, スペクトラムとしての軽度発達障害 I, pp195-204, 至文社, 東京.
- 富田 拓(2005): 遊び型非行, 家庭裁判所調査官, 児童自立支援施設, 少年鑑別所, 少年非行, 非行深度. 作田 明, 福島 章: 現代の犯罪, 12, 42, 94, 100-103, 183, 新書館, 東京.
- 富田 拓(2005): 供述をどう評価するか. 小田 晋: 司法精神医学と精神鑑定, 医学書院, 東京.
- 富田 拓(2005): 供述心理学. 中谷陽二編: 司法精神医学 2, 刑事事件と精神鑑定, 中山書店, 東京.
- 富田 拓(2006): 児童自立支援施設入所児童の精神医学的問題. 小野善郎(編): 子どもの福祉とメンタルヘルス, 175-201, 明石書店, 東京.

## 雑誌

- 梶原荘平, 齊藤万比古, 樋口重典, 田中英高, 長瀬博文(2004): 不登校の心身症的側面を評価するための問診票. 日本小児科学会雑誌 108(1); 45-47.
- 齊藤万比古(2004): “軽度発達障害” —教育および医療の取り組み—. 子どもの健康科学 5; 65-71.
- 齊藤万比古(2004): 最近の不登校. 臨床精神医学 第33巻第4号; 373-378.
- 渡部京太, 齊藤万比古(2004): 成人におけるADD, ADHDの精神病理. 精神科治療学, 425-432.
- 齊藤万比古, 今井淳子(2004): 行為障害, 反抗挑戦性障害. 小児内科 36(6); 925-930.
- 齊藤万比古(2004): 不登校, ひきこもり, 対人恐怖症など. 日本医師会雑誌特別号 131(12); S196-S197.
- 齊藤万比古, 山田慎二(2004): 自閉症とアスペルガー障害. 小児看護 27(9); 1155-1161.
- 齊藤万比古(2004): 児童・思春期における行為障害等の問題行動に対する地域の対応・連携システムについて. こころの臨床 à-la-carte 23(4); 427-432.
- 齊藤万比古(2005): 精神科医療と発達障害. 日本精神科病院協会雑誌 24巻11号; 11-19.
- 齊藤万比古(2005): 児童精神科における入院治療. 児童青年精神医学とその近接領域 46巻3号; 231-240.
- 齊藤万比古(2005): 思春期: 集団と個の桎梏を越えて. 思春期青年期精神医学 15巻1号; 2-14.
- 齊藤万比古(2005): 思春期の心の発達とその問題. 小児科診療 68巻6号; 989-998.
- 齊藤万比古(2005): 思春期の病態理解. 臨床心理学 5巻3号; 355-360.
- 宇佐美政英, 齊藤万比古(2005): 注意欠陥/多動性障害の薬物療法—9才男児の治療経過と治療

- ガイドラインの現状についてー. 臨床精神薬理 8 巻 6 号; 899-903.
- 渡部京太, 齊藤万比古: ADHD の長期転帰. そだちの科学 6, ADHDー軽度発達障害とそだち 2, 日本評論社.
- 齊藤万比古(2006): 児童面接における心得と工夫. 精神科臨床サービス 6(3); 347-350.
- 齊藤万比古(2006): 強迫性障害の精神療法. 児童青年精神医学とその近接領域 47(2); 113-119.
- 奥村雄介(2004): 「少年犯罪を考える」ー精神科医の立場から. 東京小児科医会報 23 (1) ; 8-10.
- 奥村雄介(2004): 精神障害を抱える非行少年の矯正治療と社会復帰ー保護観察制度をめぐる諸問題. 日本衛生会 117, 心と社会 35(3), 特集「児童思春期の精神保健活動をめぐって」; 36-44.
- 奥村雄介(2004): 悪性ひきこもりの現在. 臨床精神医学 33(4); 391 - 395.
- 奥村雄介(2004): 行為障害の定義と分類, 特に少年非行との関連について. こころの臨床アラカルト 23(4); 391-395.
- 奥村雄介(2005): <座談会> 矯正施設における精神医療の実際. こころの臨床アラカルト第 24 巻 3 号特集 司法精神医療の臨床, 277-294, 星和書店, 東京.
- 犬塚峰子(2004): 家族再統合ー児童相談所での取り組み. 発達 100(25); 24-30.
- 犬塚峰子(2004): 児童福祉における行為障害. こころの臨床 a'la·carte 23; 396-401.
- 犬塚峰子(2005): 児童相談所における非行相談ー非行相談に関する全国調査から. 現代のエスプリ 462; 117-129.
- 近藤直司(2004): 青年期ひきこもりケースと支援の現状. 臨床精神医学 33; 385-390.
- 近藤直司, 小林真理子, 有泉加奈絵ほか(2004): 思春期・青年期における不登校・ひきこもりと発達障害. 精神保健研究 17; 17-24.
- 小林真理子, 近藤直司(2005): 発達障害とひきこもり. 現代のエスプリ別冊, ひきこもり若者たち, 至文堂, 54-64.
- 近藤直司(2006): 青年期ひきこもりケースと「ひきこもり」概念について. 精神科治療学 21(11); 1223-1228.
- 藤岡淳子(2004): 女子の行為障害の特性をめぐって. こころの臨床アラカルト 23(4); 413-416.
- 藤岡淳子(2006): 攻撃性と衝動性の精神療法. 精神科治療学 21(8); 847-852.
- 藤岡淳子, 寺村堅志(2006): 非行少女の性虐待体験と支援方法についてー施設での実態調査から. 子どもの虐待とネグレクト 8(3); 334-342.
- 藤岡淳子, 浅野恭子(2007 刊行予定): 被虐待体験のある非行少年への支援方法についてー性非行を中心に. 精神療法 33(2).
- 市川宏伸(2004): 行為障害と医療. こころの臨床 à·la·carte 23(4); 422-425.
- 成重竜一郎, 市川宏伸(2007): 小児精神医療における子どもの攻撃性. 心と社会 127. (投稿中)
- 蓮舎寛子, 市川宏伸(2005): 児童青年期における双極性障害ー青少年の攻撃性との関連ー. 精神科治療学 20 (11) ; 1121-1126.
- 加藤進昌, 杉山登志郎, 市川宏伸, 青木省三, 十一元三, 小林隆児(2005): アスペルガー症候群

- をめぐって一症例を中心に－. 臨床精神医学 34(9); 1103-1116.
- Harada Y, Saitoh K, Lida J, Sakuma A, Imai J, Iwasaka H, Hirabayashi M, Hirabayashi S, Yamada S, Uchiyama T, Ohta S, Amano N (2004) : The Reliability and Validity of The Oppositional Defiant Behavior Inventory. *European Child & Adolescent Psychiatry*. 13 ; 185-190.
- 原田 謙, 今井淳子, 酒井文子(2005) : 反抗挑戦性障害と行為障害の精神医学. 思春期青年期精神医学 15; 59-70.
- 原田 謙, 今井淳子, 酒井文子(2005) : 反抗挑戦性障害と行為障害. 臨床精神医学 34; 1082-1084.
- 原田 謙(2005) : 反抗挑戦性障害と行為障害. 児童青年精神医学とその近接領域精神科 46; 285-295.
- 原田 謙, 今井淳子, 酒井文子(2005) : 行為障害. 精神科治療学 20 (増) ; 286-287.
- 酒井文子, 今井淳子, 原田 謙, 天野直二(2006) : 統合失調症と診断された高機能自閉症の1例. 精神科 8; 515-520.
- 吉川和男(2005) : 書評 Conduct and Oppositional Defiant Disorders – Epidemiology, Risk Factors, and Treatment (行為と反抗挑戦性の障害－疫学、危険因子、治療) , Cecilia A. Essau 編: 犯罪学雑誌 71(4); 125-131.
- 吉川和男, 福井裕輝, 野田隆政, 吉住美保, 松本俊彦, 岡田幸之(2006) : 脳腫瘍によりアスペルガー症候群を発症し母親を殺害した事例. 犯罪学雑誌 72(4); 105-119.
- 松本俊彦, 岡田幸之, 千葉泰彦, 安藤久美子, 吉川和男(2006) : 破壊的行動障害の症状と反社会的傾向の関係－Psychopathy Checklist, Youth Version と共分散構造分析を用いた研究－. 犯罪学雑誌 72(5); 135-146.
- 富田 拓(2005) : 児童自立支援施設－そこで何が行われているのか－. 犯罪と非行 143.
- 富田 拓(2005) : 思春期の非行・行為障害. 小児科診療 68(6).
- 富田 拓(2005) : 発達障害の療育に学ぶ自立支援論の試み. 平成 16 年度武蔵野学院紀要.
- 富田 拓(2006) : 児童自立支援施設. 現代のエスプリ 462, シリーズ非行の現在, 非行臨床の課題, 至文堂, 東京.
- 富田 拓 (2006) : 児童自立支援施設－子ども達は変わったか－. 精神科治療学 21(12); 1331-1336.

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）  
「児童思春期精神医療・保健・福祉の介入対象としての  
行為障害の診断及び治療・援助に関する研究」

平成 16 年度～ 18 年度 総合研究報告書

発行日 平成 19(2007)年 3 月  
発行者 主任研究者 齊藤万比古  
発行所 国立精神・神経センター国府台病院 児童精神科  
〒 272-8516 千葉県市川市国府台 1-7-1  
TEL: 047-372-3501 FAX: 047-318-4622